

宗教と人生
(一)

「宗教と人生」(一) みちしるべ文庫 41

二〇〇六年九月十五日 発行

二〇〇六年十一月一日 第二刷発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

印刷 片桐軽印刷(有)

目次

この世と人間	1
だれもが不安を持っている	4
人は安心を求めている	5
何が本当に大切なことか	5
イエスの言葉	6
イエスに学ぶ大切な一点	8
宗教とは「こころ根」の教え	8
「宗教」についての誤解	10
宗教及び神の位置	11
イエス・キリストへの関心	15
イエス・キリストの生涯	16
イエスが証示したこと	18
宗教は道徳ではない	21
聖書は道徳の書ではない	23
聖書は命令の書ではない	25

イエスは「創造における自然」を示された	27
「創造に於ける自然」とは	28
万物は生かそうとする配慮の基にある	29
「思い悩むな」ということ	31
問題は「自我」にある	34
父親と二人の息子の話	40
イエスは譬えによつて語られた	42
「譬え話」の受け取り方	44
神と人間との関係	45
命にすぎたる宝なし	47
魂とは何か	48
肉体と魂(心)	49
「身体」は念い <small>おも</small> いの固まり	50
霊の働き	51
霊とは何か	53
霊は創造的な働きと力	54
使徒達の場合	62
霊の働きは創造的な力と智慧	64
啓示と理性	69

パウロの場合	101
イエスの場合	100
イエスとパウロに共通なるもの	98
「心を貧しく」するとは	93
「心を貧しく」して行くと何が見えるか	90
さらに見えてくること	87
聖霊体験は理性の否定排除のことか	85
聖霊体験が生み出すこと	81
聖霊体験は人間の何を更新させるのか	80
イエスと人々との立脚点の違い	78
第一の世界と第二の世界	76
もう一つの出来事	74
さらに、もう一つの出来事	71
言葉の出所の違い	70
群衆や弟子の言葉の出所	69

第二分冊 目次

イエスの言葉の出所
何にも依存しない
本当の拠り所とは
単純で明解な人生の事実
樹を見る
目に見えるものと見えないもの
「宗教」とは
岩の上に建てられた家
岩は初めから足元にある
この世の意義
生きる秘訣
自分を捨てるとは
「自分」について考える
自我と自己
本当の自分を求めて

再び「自我と自己」について
なぜ自我と自己か
パウロに於ける自我と自己
パウロの直接経験と贖罪信仰 (一)
パウロの直接経験と贖罪信仰 (二)
パウロの直接経験と贖罪信仰 (三)
パウロの直接経験と贖罪信仰 (四)
パウロの直接経験と贖罪信仰 (五)
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰 (一)
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰 (二)
キリスト教の唯一絶対主義と贖罪信仰 (三)
贖罪の意味―罪の放棄と克服― (一)
贖罪の意味―罪の放棄と克服― (二)
贖罪の意味―罪の放棄と克服― (三)

第三分冊 目次

自我より深い大いなる命の営み

律法主義の魔

よくよく見なさい

思い煩うな

イエスが証示する神

あとがき

この世と人間

まことに「人生とは、重荷を背負つて坂道を行くようなもの」だと思ふ。

この世に生きるとは、いろいろな欲望を持つ身体と、さまざまな願いをいだく心を持つて生きること。それは、凄まじい現実です。この世はいつも、私たちが望むように、また願うようにはまいません。

この世は無常です。いつ何が、わが身に起こるか分かりません。思いもかけぬ出来事によって身体は病み傷つきます。そして歳とともに老い、やがて臥し、この世から消え去ります。

また、この世は無情です。わが心が抱く願いも充分にかなえられず、おおくの願いは失望と落胆と諦めでおわり、最後に、すべては夢のように去ります。まことに人生とは、心身ともに苦しく辛い旅路です。

このような人間の姿を聖書は次のように語っています。

伝道者は言う。

空の空、空の空、いつさいは空である。

日の中で人が勞するすべての労苦は、
その身に何の益があるか。

世は去り、世はきたる。

しかし地は永遠に変わらない。

日は昇り、日は沈み、

その出たところに急ぎ行く。

風は南に吹き、また転じて、北に向かい、
めぐりめぐって、またそのめぐる所に帰る。

川はみな、海に流れ入る。

しかし海は満ちることがない。

川はその出てきた所にまた帰って行く。

すべてのことは人をうみ疲れさせる。

人はこれを言いつくすことはできない。

日は見ることに飽きることがなく、

耳は聞くことに満足することがない。

先にあつたことは、また後にもある。

先になされた事は、また後にもなされる。

日の下には新しいものはない。

「見よ、これが新しいものだ」と

言われるものがあるか。

それはわれらの前にあつた世々に、

すであつたものである。

前の者のことは覚えられないことはない。

また、きたるべき者のことも、

後に起こる者はこれを覚える事がない。

—伝道の書一章二節以下—

また、聖書の「詩篇」も次のように詩います。

我らが年の尽きるは、一息のごとし。

我らが年を経るは七十歳ななそしに過ぎず、

あるいは健やかにして八十歳やそしにいたらん。

されどその誇るところは、勤勞と悲しみとのみ。

その去りゆくこと速やかにして、我らもまた飛びされり。

—詩編九十篇九節以下—

さらに次のようにも語ります。

あなたがたは、明日のこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない。

—ヤコブの手紙四章一四節以下—

だれもが不安を持っている

聖書は、この世を殊更に悲観的、厭世的えんせいてきに見ているわけではありません。聖書が語ることは理屈ではなく、この世の事実を語っているのです。それは、どの人に於いても現実のことです。このような人生の空しさくわを、人は背負い、また、引きずりながら生きています。この事実こそが人間の限界点なのでしょう。また、この限界内に生きざるを得ない者が人間としての私たちです。

よく落ちついて、自分の生を思いめぐらすとき、私たちはまことに「はかない者」です。先に聖書は「あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない」と教えてくれましたが、別な言い方をすれば、人は「根無し草・浮き草」のようなものとも言えましょう。つまり、私たちは自分の生きる支えや根拠を持たないまままで生きている者です。このような在り方は不安以外のなものでもありません。

私はどこに生きているのだろうか。自分が生きる意味はなになのだろうか。なんのために生きるのか。本当に自分を支えてくれる根拠が分からない人生は、文字どおり「頼り無い人生だ」と言えます。

それにしても、このような自分の存在は、その人が気づいても気づかなくても、結局、根無し草のような自分であることには変わりがないのですから、私たちの誰もが、どこか不安を感じ、なにか知らないけれども落ちつかず、ハッキリしないけれども生きている自分に寂しさを覚える、

というような感じを無意識にもつことになるのです。それを一口に言えば「自分自身の人生の不安」ということです。

人は安心を求めている

どの人も自分が安心して生きて行けるなにかを求めています。また、自分を活き活きさせてくれるものを探しています。そのために、私たちはいろいろと試行錯誤します。仕事や趣味にそれを求め、酒に、遊びに、ときとして奉仕活動にそれを求める人もいます。さらには宗教団体にそれを求めることもあります。しかし、それらが、その人の存在の不安を真底から取り除き安心を与え、こころ安らかに物事を見、または考え、深い感謝と喜びと愛を得られる保証になるでしょうか。それは時間が経つにしたがい空しさに変わり、疑義の思いが生まれ、さらにはおよそ安心とは程遠い、憎しみや争いや競争、加えて偏見の持ち主と化してしまうことにならないともかぎりません。

何が本当に大切なことか

どの植物にもそれを支えている根っこがあります。その植物が大きくなればなるほど、それを支える根っこが一層しっかりと大地の中へ張りめぐらされていきます。その場合、大切な根っこ

は見えませんが。でも植物にとつて根っこは最も大切な支えです。根っこは植物が存在する「根拠」です。ところが、人々はその植物の根っこを見ないで、見える枝や葉、花や実ばかりに関心向け、それによつてその植物を評価し、「美しい花、美味しい実」等、しかも自分の好みや趣味といった自分勝手な利得の思いで取扱います。

人間についても同じです。その人が何を自分の根拠としているか、または、本当に支えになるものを持っているか否かということが、その人にとつて一大事なのです。

「空の空、空の空」と先に聖書にありましたが、それは「根拠が無い」「根っこが無い」ということです。また「あなたがたは霧のようだ」と言うのも「何の支えも無い者」ということです。人生で美しい花を咲かせて多くの人々を「アツ」と感嘆させること、また立派な実をならせて世間に名声を馳せること、それ自体素晴らしいことです。しかし、その人が自分を支える確かな根っこ、または根拠としての土台を持っていないなら、所詮は浮草のような存在、一時ひとときの徒花あだばな、見かけの果実をつける人生にすぎません。すべては霧のように消えて無くなるだけです。

イエスの言葉

人間の存在の根拠、私たちの人生の支えについて、自分の命をかけて証示された方、それがイエスです。イエスの言動のすべては、この一点を証示しています。次の言葉もその一つです。

わたしのこれらの言葉を聞いて行かう者を、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そして、その倒れ方はひどいのである。

—マタイによる福音書七章二四節以下—

イエスは「岩を土台として家を建てよ」と言われます。それは、確かな支えをもって人生を歩め、ということなのです。

イエスは「砂の上に家を建てな」と言われる。砂の上とは土台が無いということ、外見だけのものを生きる土台にするな、ということなのです。

岩の上に建てた家は「風が吹きつけても、洪水が押し寄せても倒れない」と言われる。生きることは大変だ。しかし磐石の土台の上に立つ人生はどのような状況に立たされても、栄光に満ちた者とされる、と言われる。

しかし、砂の上に建てた人生は、どれほどその外見が立派であり、内側が整えられていても、必ず倒れ、外側と内側とが立派であるほど、その倒れ方はひどく、失うものは多いと言われる。自分の人生の足元に確かな土台を持たぬものは「愚かな人だ」とイエスは言われる。

イエスに学ぶ大切な一点

イエスの徹底した愛の言動は、時と所を超え多くの人々から尊敬され、同時に人の心を慰め、苦しみを癒し、生きる希望を与え、人類愛へと人々を感化してきました。その意味でイエスは偉大なお方です。しかし、大切な事は、そのような偉大な生涯へイエスを促した命は何なのかという事です。一体、イエスは何を見ていたのか。そして自分自身を何処に置いていたのか。イエスは何処に立ってこの世を生きていたのか。この一点がイエスに学ぶ最も大切な事です。その一点を「大いなる命の土台」というなら、聖書を学ぶことの意義は、私たち一人一人が自分の人生の、そして生活の「命の土台」を学び、それを得るところにあると言えます。

自分が立っていると分らず、したがって、自分が歩む方向もわからないまま、ただ目先のこと、この世のはかなき夢を追って、ただこの世を生きるだけなら、「砂の上に家を建てた愚かな人」になってしまおうでしょう。それにしても、「大いなる命の土台」とは何なのでしょうか。

宗教とは「こころ根」の教え

「宗教」とは何か。多くの説明や解説があり、それぞれの立場からの見解がある。私にとって

「宗教」は、とても地味なものの、つまり日常生活の表面に目立って現れてこないけれども、私の生きる命の芯じんとなつてゐるものである。

「宗教」は、「私のもの」として騒ぎたてるものではない、と思う。「宗教」という漢字の「宗」を「こころね(根)」と読んだ学者がいる、その読み方に私は共感している。つまり、「宗教」とは「心の根っこの教え」だということだ。

これを地上に現れている植物にたとえてみるなら、「根」は地面の下深くに張っていて見えない。しかし、その根が植物を支え生かしている。それが証拠に根を切られた植物は忽ち枯れてしまふ。植物にとつて根は目立たないがそれを活かす命の芯である。幹や枝、葉や花、そこになる実、それらの目に見える部分は、目に見えない根によって支え活かされている。根が宗教の世界であるなら、地上に現れている部分はさしずめこの世の目に見えるものごとがらである。

その場合社会的な宗教現象一般もそこに含まれる。(社会的な宗教現象とは「○○宗教」「××教」の組織、教義、儀式、その結果もたらされる癒しなどの御利益現象を含めて、目に見える広い意味での一つの文化現象のことである)つまり、宗教とこの世に存在するものとの関係は、根としての目に見えない宗教の世界が第一で、目に見える世界は第二の事として現成する世界なのである。私たちは見えない根っことしての宗教と地上に現象している所謂「宗教」とを混同してはならない。

しかし一方、植物においては、根だけが大切なのではなく、幹や枝から生ずる葉も花も実も大切である。特に葉は太陽の光のエネルギーを利用して炭酸ガスと水から澱粉をつくる所謂光合成によつて根も育てる役割をはたしていることは、一般に知られている。つまり、目に見えない根

と目に見える葉との関係はそれぞれは同じではないが、同時に相補的で別なものでないということ。植物の存在についてのこの事實は、目に見えているこの世と、目に見えない世界とは別でありながら分けることは出来ないという関係にある、ということを示唆している。

「宗教」についての誤解

ときとして「宗教」は「こころの世界」のことと受け取られる。また目に見えない神や仏は聖く、目に見える世界は俗で汚れていると理解される。さらに、目に見えないものは永遠で価値があり、見えるものは儂はかなきもので価値無きものと教えるのが「宗教」だとされる。しかし、それは「宗教」についての誤解である。

一方、「宗教」はこの世の生活に直接利益をもたらす「打ち出の小槌」のように思っている人がいる。金持ちになる、立身出世をする、病氣や苦難が去る等、ひたすらそれを祈願し、願いを叶えてくれるものが「宗教」だと思っている。しかし、それも「宗教」についての誤解である。宗教は本来、目に見える世界と目に見えない世界とは、一つの命に結ばれているものだとこのことを語る。目に見える世界に宗教があるのではない。また目に見えない世界に宗教があるのでない。宗教は目に見える世界や目に見えない世界のすべてを超越した大いなる命のたぎりとして、それらの世界を根元から抱きかかえてそれをそれとしている出来事の世界を提示している。にもかかわらず「見える世界と見えない世界」とか「この世とあの世」、さらに「聖なる世界

と俗なる世界」に分け、その一方の立場に立ち、他方を軽んずる考え方を宗教的な生き方だと思つている人が、宗教人のなかにもいる。それは根だけを重んじて幹や枝や葉や花を軽んずることと同じであり、また、幹や枝や葉や花などの利益だけに執われて根を軽んじるのに似ている。しかし、樹が生えているということは、目に見える部分と目に見えない根の部分とは同じではないが、二つは分かつずに相補性を保ち、その樹として在らしめられているのである。

宗教及び神の位置

「宗教」を問うとは、自分が生きて行く本当の拠り所を問うことである。即ち自分の存在の真実の根拠を求めること、大いなる命の土台を求めるということである。そのことを一般では「神を求める」と言い、その神を信じる事を「信仰」と言っている。その意味で「宗教」の内容は神と人間との関係を問うことだと言える。また、「宗教」を問うことは自分が生きるなかでの神の位置を問うことでもある。

イエスは「天は神の玉座」であり「この世は神の足台」であると言われた。(マタイによる福音書五章三四節以下)つまり、イエスは、神は天と地に命していると言うのである。また旧約聖書の信仰人は神を次のように賛美した。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はその御手のわざをしめす。

この日、言葉をかの日につたえ、

この夜、知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声きこえざるに

そのひびきは全地にあまねく。

その言葉は地のはてにまでおよぶ。

—詩編一九篇—

即ち、神の命のたぎりは波動して天地におよび、すべては神の命の反映として、それぞれに相応しく存在すると言う。このような神の命のたぎる現実をヤコブは、いみじくも、次のように看破した。

愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない。あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父(神)から下って来る。父(神)には、変化とか回転の影もなし。

—ヤコブの手紙一章一七節—

聖書に於いては天も地も、見えない世界も見える世界もすべて神が創造し、しつらえてくださった大いなる命のたぎる場なのである。このような神の命のたぎりから言えば、もはや、この世もあの世もない。また聖も俗も無い。有限も無限も無い。あるのは神の大いなる命のたぎりだけである。まさに神は、絶対の愛と恵みと化して天地宇宙をまる抱え、命しているのである。この

神の命のたぎりの事実をヤコブは「神には回転の影もなし」と賛美した。これをイエスは次のように語る。

父(神)は、悪人にも善人にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。
— マタイによる福音書五章四五節 —

すべての善悪に先立って先ず、神の命のたぎりがある。人間が計らう以前に神の回転の影もない絶対の愛と恵みとが、どの人の基にも来ている、だからどの人も生きていられるのだ。これこそがまさに「命の土台」なのである。

使徒パウロの場合、この神の愛と恵みなる「命の土台」を悟ったそこから、次のような言葉が出てくるのだ。

神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない。
— テモテへの手紙 I 四章四節 —

かつてパウロが身を置いていた宗教は「律法遵守救済主義宗教」とも言える当時のユダヤ教であった。神が与えた戒律(律法)があり、それを遵守(じゆんしゆ)守守することで神の救済にあずかるという宗教である。その場合、救いは到達点にあって、そのゴールを目指して律法(戒律)を一所懸命に守らねばならぬ自力信仰のようになっていた。パウロは、彼自身の激的な努力によって完全遵守した。

しかし、その結果得られるはずの救済の平安と喜びがなく、かえって自分の内に自負の心、傲慢の心、誇りの心、と同時に律法（戒律）を守れない者に対する軽蔑の心、侮蔑の心が生まれてくる自分を自覚することで、律法遵守救済主義宗教にひそむ「魔」を見たのである。と同時に、自分の内に救いがたい「罪人性」のいつその深まりに気づいたのである。

パウロがそれまで身を置いたユダヤ教では、自分の熱烈な努力によつて到達することで得る救いがイエス・キリストの福音に於いては、「自分の努力とは関係なく、努力以前にすでに自分が生きている現場に救済があった」ということに開眼したのである。つまり、到達点ではなく、「出発点にすでに救済があった」のだ。それは、自分が努力をしないでもない。自分が救われるか滅びるかではない。自分が律法を遵守するか否かではない。自分の善悪ではない。自分が救われるか滅びるかに先立って、すでに満ちている神の愛に包まれている自分を発見したのである。一切の計らいに先立って、すでに満ちている神の愛に包まれている自分を発見したのである。

人はだれでも人間として充実した人生をおくりたいと願っている。その願いを現実のものとするものは何であり、何処にあるのだろうか。この人間の問いと願いに答え得る唯一のもの、それが宗教である。しかし、その宗教は地上に現れた文化としての特定の宗教を自我が選択し、その教義を信じ、その組織に属し信徒と認められるところにあるのではない。真の宗教はその人が生きる足元にある。その人の思いに先立って、その者の命を根柢から成り立たせ生死を超えて支えている大いなる命にある。だからこそイエスは言われた。

「神の国（神のお恵みの働き）は、見える形で来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えないものでもない。実に神の国（神のお恵みの働き）はあなたがたの直中にあるのだ！」

私がイエスから受け、パウロから示された宗教と神を語るなら以上のとおりである。

イエス・キリストへの関心

イエス・キリストと言うと、「キリスト教の教祖だ」と思う人が多い。そのような思いから、「わたしの家は仏教(又は神道)ですから、イエス・キリストに関心はありません。」「日本には仏教や神道など立派な宗教がありますから、わたしはキリスト教やイエス・キリストは関係ありません」と言う人がいます。しかし、それはいささか軽率な考えではないかと思えます。

わたしにとって、イエス・キリストへの関心は、所謂「キリスト教」という「宗教」以前に、イエスがこの世をどのように見て、自分の人生を生きたのか、ということを知ることであつて、「キリスト教徒」になるために「キリスト教」を学ぶものではありません。勿論、キリスト教徒になりたいので学ぶ人もいるでしょうが、その場合でも、自分を殺害する者のために、神の赦しを十字架上で祈りながら死んで行つた「イエスの徹底した愛の生き方」に心がひかれるからだと思います。

つまり、イエス・キリストの生涯を学ぶということは、「キリスト教」という宗教の信徒になるか否か、又は、その宗教が西洋の宗教か否かということとは関係なく、より良く生きたいと願

う一人の人間として、イエスの生き方が理屈ぬきで心の芯に響いて来る何かがある。まったく無関心ではすませられない何かがあるということ。自分の人生にとつて大切な何かがあるのではと思う、人としての思いが、時代や民族の差を超えて多くの人々をしてイエスに関心をいだかせてきたのだと思います。

イエス・キリストの生涯

イエス・キリストの生涯を知るための唯一の手がりは現在では「新約聖書」の中の「福音書」と言われている書物だけです。もともとイエスは何も書き残されませんでした。その弟子たちがイエス・キリストに出会い、共に生活するなかで見、感じ、知って見出した神さまの命の世界、―それは人間の本当の安らぎ、失望に終わらない確かな希望、この世には多くの艱難や苦勞があるが、それでも生きていこう、生きて行ける、生きて行くのだ、という本当の人生の救いに目覚めさせられたのです。だからこそ、イエスが身をもって証示され、自分が身をもって受けた神の有り難き命の世界を、書き記したのが「福音書」(福さいわいいなる音おとずれ便の書)となつたのです。

「新約聖書」には福音書を記した四人の名前による四つの「福音書」があります。それが「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」です。先にも言いましたが、イエス・キリストの生涯を記した文章は四つの福音書以外にはありません。しかし、これらの福音書は、イエス・キリストの生涯を克明に記録した、所謂「イエスの伝記」

ではなく、イエスに親しく接した人(弟子)、または人達(原始教団)が、イエスとはどのようなお方だったのか、ということ、イエスの言動を語ることで信仰的に告白した文章なのであります。ですから、私たち現代に生きる者が福音書を読んで、イエスがなさった不思議なこと、つまり奇跡などに接して、「こんな”おとぎ噺”のようなことは信じられない」と思われるなら、それは「はやとちり」というもので、そこで語られていることは、「奇跡云々」ではなく、その出来事を通して証示されている、「どの人にとつても生きることに於いて極めて大切な事」をそこから受けとることが重要なのであります。

私たちは、生活のなかでさまざまな「事」に出会います。その場合、出会った「出来事」”その事”だけに囚われてしましますと、その「出来事」に於いて了解しなくてはならない本当の「こと」を見失ってしまい、表面的な「出来事云々」ばかりを議論して、賛成・反対、肯定・否定、の空しい論議に明け暮れるようになります。それは愚かなこと、馬鹿げたことだと思えます。ですから、「福音書」におけるイエスの奇跡と言う「出来事」をそのような視点から論じるなら、およそ福音書の記者がイエスについて証示しようとした”どの人にとつても大切な事”を見失うことになります。勿論「イエス・キリストは神の子なのだから、奇跡などは簡単にお出来になります。それを信じないのは不信仰です」といった熱心な？論理は、私は”どうかなあ”と思いません。ましてや、二千年も昔の、そして日本とは異なる精神的(文化的)且つ自然的風土の中で生活した人達の言動を通して語られた事柄を、そのままそっくり現代に生きる私たちが受け入れることを、「聖書の信仰」というなら、その聖書の信仰は極めて合理的、表面的な信仰だと言えないでしょうか。人を見るにその人の外見云々ではなく、その人の”精神の芯”を知ることが肝要な

のと同じです。

イエスが証示したこと

イエスが身をもって証示した“どの人にとっても大切なこと”とは何だったのでしようか。それについてイエスは明解に事実をもって語られました。先にも紹介しました次の提示です。

父(神)は、悪人にも善人にも太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。
— マタイによる福音書五章四五節 —

このイエスの提示は、イエスがこの世をどのように見、人生を如何に生きればよいのかということの根本の提示です。それは私たちが人間として生きるための最低の心得なのです。

このイエスの提示は、理屈ではありません。イエスが考え出した理論ではありません。人が生きていくという出来事の現場で、その人が何かを考え思い、行動する以前に、既にその人に無条件に備え与えられて、その人を生かしている神の大いなる命の提示なのです。この提示をさらに詳しく次のように語られました。

だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のこと

で何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない、だが、あなたがたの天の父(神)は鳥を養つてくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのようなにして育つか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言つておく、榮華を究めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾つていなかった。今日は生えていて、明日は炬に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから、「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言つて、思ひ悩むな。それはみな、異邦人(神を知らない者)が切に求めているものだ。あなたがたの天の父(神)は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国(神のお恵みの支配)と神の義(神が必ず実現してくださる正しさ)とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで、思ひ悩むな。明日のことは明日が自分で思ひ悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。

— マタイによる福音書六章二五節以下 —

イエスは人生を語りつつ、神を語りつておられる。それは、人生を深く見つめていますと、神を仰がざるを得ないようになるのです。地に在つて本当に力強く生きようとすると、天に目を向けざるを得なくなるのです。なぜなら、地にあるものはすべて天の裏付けなくしてあり得ず、人は初めから神なくして人であることは出来ないのです。それは人間は限りがある者だからです。

空の鳥や野の花がどのようであれ、空や地、鳥や花はそれ自体で在るのではなく、先ず空として、地として、鳥として、花として、神にしつらえられており、その結果、空として、地として、鳥として、花として在り得るのです。この事實は、私たち人間に於いても同じです。その人が食べることに、着ること、その他さまざまな事柄に思い悩み、考え努力し、ものを作り行動できるように先だつて、神が人に生きる場をしつらえ、生きる命をそれぞれに備え、知恵を与えて互いに親しみ助け合つて生きるようにして下さつて居るのです。だから人は生きる事ができるのです。このように、人が生きるといふことは神から始まるのです。それどころか、人が老い衰え、やがて死ぬるようにもして下さつて居るのです。つまり人は神の命の支えと許しのもとで生まれることも生きることも、死ぬことも出来る者として在らしめられて居るのです。人は「死んでも生きても神の中」なのです。

ですから、イエスはその神の大きいなる命のそこで、また、そこから「あなたがたは思い悩むな」と發語なされるのであつて、「思い悩む人間の計らいの場」から「思い悩むな」と言つておられるではありません。つまり、どのような人も「思い悩む人」に向かつて「思い悩むな」とは決して言えないのです。どのような人も、思い悩まざるを得ず、その悩みから一歩、半歩たりとも逃れることは出来ない限界を持つ者なのですから。

しかし、人は自らの存在の限界をわきまえず、人が生み出した何かを最後の抛り所として、それに頼つて「思い悩み」から立ち上がるうとします。でもそれは出来ません。なぜなら人間は自分自身にとつて自分が最後の抛り所ではないからです。

自分にとつて自分自身が最後の抛り所ではない、といふことは人間にとつて有り難いことなの

です。イエスは、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」と言われた。つまり、人は「今日」の主人でもない、ましてや「明日」の主人ではない。「今日と明日」の主人は「今日と明日」とを人のためにしつらえた大いなる命の神であり、したがって、人はしつらえられた安心の「今」という場を、自分の力の限りを尽くして生きよ、と促されるのです。そのような場で自覚的に「今」を生きたとき、人は本当に人となるのです。だから「何よりも神の恵みの支配を求めなさい（開眼しなさい）」とイエスは言われる。しかし、人間は、自分の根拠は自分である。人間の根拠は人間であり、人間の理性でもって無限に今日も明日も切り開いて前進出来ると確信して歩んできた。が、人間にもともと自分の根拠など無いのに、自分にあると確信すればするほど人は生きる不安と悩みが倍加し、今や人間であることの土台が根柢から崩れかけている危機的状況が現代です。イエスの証示には単に「宗教」を超えて、すべての人間が真面目に傾聴すべき真実があります。

宗教は道徳ではない

「宗教」は「道徳」ではありません。宗教と道徳とを混同してしまっている人がいらっしやいます。

「一緒に礼拝に参加しませんか」

「イヤー、わたしみたい人間は、教会などへ行けませんよ。もう少しきれいな心がもてるようになつたら、よせてもらいます。でもネ、現実はきびしいですからねえ……」

「ハア……」

「道徳」という言葉を国語辞典でひいてみますと、「人のふみ行うべき正しい道」「社会生活の秩序を保つために、一人ひとりが守るべき、行為の基準」と説明しています。これを簡単に言えば、悪いことはしないで、よいおこないをする。ということになります。

「人のふみ行うべき正しい道」を守って生きることとは、とても大切なことです。その意味で道徳を軽んじてはならないとおもいます。

一方「宗教」という言葉を先の同じ国語辞典でひいてみますと、「心の空洞を癒すものとして、必要な時、常に頼れる絶対者を求める根源的、精神的な営み」と、すこしむずかしい言い方で説明してありました。このように国語辞典の説明を見ても宗教と道徳とは同じではないことが少しはわかります。結局、道徳と宗教はどのように違うのでしょうか。辞典の説明からでも分かるとおり、道徳は人間の生き方の現れた部分であるのに対して、宗教は人間の心のもっとも深い内面に関わる事と言えます。

聖書は道徳の書ではない

一口に言えば、聖書は宗教の書であつて、道徳書ではありません。ですから、道徳の書として読むなら、聖書が示す世界を正しく得ることは出来ないでしょう。勿論、そのように聖書を読んでも、その内容は道徳訓として立派な人間の生き方を示してあり有益な書です。しかし、本当に聖書が示すことを得たいと願うなら、宗教の書として接することが必要です。聖書に次のようなイエスの教えがあります。

あなたがたも聞いておるとおり「目には目を」「歯には歯を」と言われている。しかし、わたしは言つておく、悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが一キロメートル行くように強いるなら一緒に三キロメートル行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に背をむけてはならない。……わたしは言つておく、敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父(神)の子となるためである。……

—マタイによる福音書五章三八節以下—

このイエスの教えは、道徳訓の極致とも言うべき立派な教えです。しかし、これらの教えを、

その文字どおりに道徳訓として受け取り、行いの基準として実行するならば、その人は最後に自分の命を失ってしまうのではないだろうか。悪人に手向かわず、右の頬を打たれるとき、自ら左の頬も出し、上着を奪おうとする人に、自ら下着も差し出し、求めて来る者に何一つ拒むことなく与え続けるならば、その人は最後に何も無くなってしまい、死を覚悟しなければなりません。確かに、求めて来る人に、徹底的に自分を与え尽くすことは道徳的に最高に称賛される行為だと思えます。しかし、誰もが出来ることではありません。普通に社会生活をしている人に積極的に勧められることではないでしょう。とすると、聖書は、人間の願望としての理想を語っているように思えてきます。あまりにも現実と離れすぎている教えに思えて来ます。先に紹介した会話にありましたように、

「でもね、現実には厳しいですからねえ」

という皮肉を含んだ答えが返ってきます。

このように、聖書は現実には実行出来そうもない、しかし、そうあればよいのにと、人間の願望やあこがれを語っているように人々は思ってしまうでしょう。

「聖書には、善いことが記されていますなあ」というそれだけで終わってしまい、それ以上に何もない、ただの善い教えになっってしまうでしょう。

聖書は命令の書ではない

聖書は命令の書ではありません。しかし、人は「これこれのことをしてはならない」「なににのこを言いなさい」というように聖書の言葉を「命令の言葉」として受け取ります。その結果命令に従ってそれが出来る人は立派な人で、出来ない人はダメ人間のように思ってしまう。つまり、出来るか、出来ないか、従うか否か、と単純に受け取ってしまう。しかし聖書にはそのような命令の言葉はありません。（聖書の中に「命令形」の単語がないということではない）

わたしは言うておく、だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。

— マタイによる福音書五章二七節以下 —

これらの聖書の言葉を命令の言葉と受け取った多くの誠実な人達は、その内容の高潔さと、厳しさに、自分をどう対応させればよいのかと苦しんできました。その結果、これらの言葉をいろいろと、解釈して、ある意味では、そこから逃れるための合理的理由づけの解釈を行ってきました。言うならば、それほどに、これらの聖書の言葉そのものが、どの人にとっても難題だったと

いう証拠なのかもしれません。結局それは、聖書の言葉を、道徳的な言葉、命令的な言葉(律法)と受け取ったからです。

ここで、誠実な人達がどのようにこれらの聖書の言葉をそれぞれの論理で受け取ったか、即ち解釈したか、その代表的な一つが、イエスは人間に、人の罪深さを知らせるためであり、それによって人間が、イエス・キリストによる十字架の贖いによる救いを信じ受け入れるためである、という解釈です。つまり人間は根本的に神の教えに従い得ない者としての「まじ的はずれな者」。救いがたく歪められた者。神に裁かれなくてはならない者。即ち「罪人」であることを、人間に深く自覚させるために厳しい教え(律法)を与えた。それは、イエス・キリストの十字架による贖罪が人間を(罪深い自分を)救うための神の一方的な愛の行為であること(福音)を信じ、受け入れ(信仰によって)救われるためだ、という解釈です。即ち、先のイエスの教えを「律法」として解釈したのです。

しかし、イエスの示しをこのように解釈することはパウロの解釈をイエスに当てはめたものであり、それはイエスのお考えに即してはいない、という見解に立つ人が新約聖書を研究する世界では多数をしめつつあるようです。

たしかに、先のような所謂「律法と福音」という関係での解釈は、パウロの立場です。パウロは「律法によって罪の自覚が生じる」。だから「律法は、わたしたちをキリスト(十字架の贖罪)のもとへ導く養育係だ」と言う(ガラテヤ人への手紙三章二一四節)。この立場は宗教改革者ルターに引き継がれ、プロテスタント教会の正統的信仰に大きな影響を与え、その解釈に立つ人や教会は多い。この福音理解をパウロは「ローマ人への手紙三章」「ガラテヤの信徒への手紙三章」等

で熱心に語っています。是非、読んでいただきたいと思えます。

さらに今一つ興味を引く解釈は、イエス当時、世の終わり、つまり神の審判により神の国の到来が近い、という終末論的な状況のもとでこそ、通用し理解できる教えである、というシュヴァイツァーの解釈です。シュヴァイツァーはフランス領アフリカのランパレネで原住民のための医療と伝道に夫人とともに献身した人として有名ですが、彼は医者であると同時にドイツの神学者であり哲学者、バッハの有名な解釈者、オルガン演奏家でした。こうした研究者の解釈の紹介は、ここでは特に必要でなく、また私の分ではありません。問題はパウロでなく、イエスはそこで何を人びとに提示しようとしたのか、ということなのです。

イエスは「創造における自然」を示された

そこで、福音書のイエスから頂いた私のイエス理解を語らせていただきます。

既に、イエスの言葉は「道徳の言葉」や「命令の言葉」、つまり、「律法の言葉」ではないと申してきました。それではイエスの言葉はどういう言葉なのかと言いますと、「創造に於ける自然を提示した言葉」だと私は受け取り解釈しています。

それにしても、突然に「創造に於ける自然」などと言いましても、すぐには理解できません。でも、イエスの言葉を素直に福音書から聞き取るとき、わたしの場合はそのようになるのです。そして、このイエスの言葉の中身が了解できると、パウロがイエスを通していただいた福音の中

身も、私の場合よく分かるようになり、「宗教と人生」との関係が一層に大切なことであると思ふようになりました。

イエスは一体何を私たちに語り示したのかということ、「創造における自然」という観点からご一緒に学んでみようと思います。

「創造に於ける自然」とは

私たちは「何かのために」生きているわけではありません。なのに、人は、「何々のために」という目的を作ったり、持ったりして行動します。また、そのような目的を持たないと生きる価値や意味がないと思ひ込んでいるようです。

勿論、自分の身体的な健康を維持する「ために」適当な運動をするとか、また外国人と交わり、その国の事を記した書物を読む「ために」外国語を学ぶことは大切な事で、そのような意味での「何々のために努力する」必要はない、と言っているではありません。

そうではなくて、人間が存在している、生きている、ということ自体に、「何かの目的や意味を」特別に作らなくてもよいのだ、と言っているのです。

「生きる目的も意義も持たない人生など、わたしにはありえない。自分の人生に生きる目的と意義とを、しっかり持つて生きるところに人間らしい生き方があるのだ。人間は犬や猫のように、ただ生きるだけではだめだ！」

というお叱りの声が聞こえて来そうです。また、「そうだ、そうだ！」と仰る声も一方から聞こえてきそうです。しかし、そう簡単に否定や賛成をしていただいては困ります。私が申し上げたいことは、私たちが自分の人生に目的や意義を自分で作るうとしなくても、それ以前に、私たちの生きる根っこには「生きてもよい。生かそう。生きなさい」という「大いなる命」の恵みがつらえられてあるのだ、ということです。この命の事実を「創造に於ける自然」と私は言っています。

万物は生かそうとする配慮の基にある

どの人も、自分の配慮で生きてるのでありません。自分以上の大いなる命の営みの基で、生きるようにしつらえられた人生という場に置かれており、その場でそれぞれが知恵を働かせて生きるように創造されているのです。

イエスはあるとき、次のように提示されました。

またイエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

イエスは理屈を語られない。事実を示しておられるだけです。このイエスの提示は説明するまでもありませんが、あえて、説明的に語るなら、次のようになります。

「神の国」即ち、「神の一方的なお恵みの命の働き」がどのような事かと申しますと、それは、人が土に種を蒔いて、そのまま夜昼、寝起きしている間に、蒔いた種は芽を出して成長して行くようなものです。それは、人の決定や努力とは関係ない大いなる命の営みです。土はひとりで「自然に」種に実を結ばせます。最初に茎、次に穂が、そして最後に豊かに実ができる。そして実が熟すと、早速、人は刈り入れをします。その時が来たからです。

勿論、今日的農法で言えば、良質な種に改良選定し、必要な肥料を土に入れ、水や光や病害虫駆除の管理をして、より多く、より良い質の実を収穫する、ということになるでしょう。

しかし、ここでイエスが語っておられることは、種が土に於いて成長する命の基本的な不思議な様子についてです。人が努力しいろいろと配慮する以前に、すでに種は土に於いて成長できるように、すべてがしつらえられてある、という一方的なお恵みとしての命の躍動の事実、その原事実の提示なのです。

土があり、種がある。ということとは人間の配慮以前の事実なのです。そして土と種とが関わり、その他の必要な、例えば太陽の光、天から雨等々が用意されて、芽を出し、茎をもち、葉をなら

せて遂に実を結ぶ、その為に虫や風が用意されている、良く観察しないと見えない、物事の関わりとその順序等の働きは、まさに「人が昼夜、寝起きしているあいだに、ひとりで（自然に）実を結ばせる」創造に於ける自然の命のたぎりの現象なのです。ここで言う「自然」とは、自（おのずから）然（しかる）という意味の原事実としての命のたぎりその事を意味しています。したがって、このような命のたぎりの原事実のそこに於いては、人間の知恵や努力による配慮など入る余地は無いのです。それは人の配慮以前の、人の限界を超えた大いなる命の世界です。その命の働く世界をイエスは「神の国」（神の支配）と言われました。このような命の原事実の現場、またはこのような命の根っこから語られたイエスの教えが「思い悩むな」という提示です。その言葉に耳を傾けてみましょう。

「思い悩むな」ということ

だから言っておく。命のことで何をたべようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種を蒔かず、刈り入れをせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかも延ばす事ができようか。こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言

つておく、栄華を究めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかつた。今日は野にあつて、明日は炉に投げ込まれる草でさえ神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。あなたがたも何を食べようか、何を飲むかとか考へてはならない。また、思い悩むな。それはみな、世の異邦人(神の命の原事実)に気づかない人がせつに求めているものだ。あなたたちの父(神)は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国(神の一方的なお恵みの命の働き)を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父(神)は喜んで神の国(恵みに満ちた大いなる命の働き)をくださる。

——ルカによる福音書二二章二二節以下——

イエスは「食へること」や「着ること」について「思い悩むな」と言つておられるのではない。今日の食事の献立を何にしようか、出かけるときに、何を着て行こうか。と私たちはあれこれと思案します。それは当然のことです。何もしないで食事は出てきません。また、必要な着る物が天から舞い降りては来ません。

イエスが言われる「思い悩むな」とは、あなたは、自分の知恵や努力によつて生きています。知恵や努力による「自分についての配慮」が自分を生かし、支える最後の拠り所ではない。人間の究極の拠り所、支え手は、その人の知恵や努力を超えたところに、すでに有り、現に働き、どの人もその大いなる命の現場に生かされている。「鳥のことをよく考へてみなさい。種を蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養つてくださる……今日は野

にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神は装ってくださっている」この事實は、存在の根源的な命の働きの証示です。「まして、あなたがたにはなおさらのことである。」「あなたの神はこれらのものがあなたがたに必要なことをご存じである」だから、神にしつらえられた人生の現場で、一生懸命に自分の分を生きなさい。神はどの人も生きられるようにしてくださっているのです。とイエスは言われる。

つまり、自分の計らいで自分を支えているのではない。計らう自分を、そのまま支えている根源的な命が、自分の生を生たらしめている、その命の現場からイエスは「思い悩むな」と語られるのです。イエスは人が「思い悩む以前に」はじめから、人の足元にあつて人を人たらしめ生かしている「脚下の恵み」のそこでは「思い悩み」は無いと言われるのである。

しかし、私たちは、その根源的な命の現場に日々立つことを許されて生きている、という本当の自分の存在の事實に目覚めず、気づかず、また、気づこうともしないで、「自分が、自分を支えなくては、自分は一時も生きてはおれない」と思い込んで生きている。それは自分が描いた幻想であり、自我が生み出す傲慢です。

それにしても、私たちは、心の深みで、自分で自分の生を保証し支え切れない者であることを、ひそかに予感しています。その証拠に、誰もが自分の存在について危惧、懸念、憂慮といった不安を引きずり、何か満足感、充足感を欠いたまま本当に落ちついた安心を持ってずに過ごしているのです。

問題は「自我」にある

「人はパンだけで生きるものではない」とイエスが悪魔に言われたと聖書に記してあります。(マタイによる福音書四章四節)それにつづいて「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言われました。このイエスの教えの中心は、一口に言えば、人間は自分の知恵や努力で生きている者でなく、神の大いなる命の元で生かされている、ということなのです。この大切なイエスの提示を聞かないままで、「人間は生きて行くのにパンも必要だが神の支えも必要だ」などと説明するならば、その人はイエスの言葉を何一つ聞いていない。それどころか、人間の常識のレベル、自我のレベルで、うわつつて「いるだけです」。

ここで言う「自我」とは、「自分は自分によって自分である」と信じ、「自分の根拠を自分自身においている」「自分。または、「自分の拠り所は自分だけである」とする自分のことです。そのような自我は、「神」も「宗教」も「信仰」も「聖書」も自我の次元で抱え込んでしまうのです。それはあたかも、Aさんの事を語るのに、自分の思い、考え、感じて語り、それで、Aさんのすべてを語ったと思いついでいる人と同じです。その場合結局、Aさんを一言も語らず、ただ自分の主観で理解した自分勝手な、Aさん像を語ったにすぎません。語られたAさんは「ヤメテクレ！」と叫びたくなりましょう。と、考えて来ると、どの人の足元にも現にあり、その人を生かしている根源的な命の事実、即ち「神の支配」「創造における命の自然」を見えなくしている

のは、人間の「自我」の働きのよることがハッキリしてきます。問題の根は自我の在り方にあるようです。

一般に「自我」とは、他人と区別している自分のことです。そして、その自分が、何かと関わることで感じ、考え、行動する、つまりいろいろと経験する当の自分を、自分だとする自分が「自我」ということです。

ですから、このように自分を自分だとハッキリ自覚すること、即ち、自我を意識することは、個としての自分の確立であると同時に、社会の一員としての責任を持つということになります。一般に「成人式」は、その自覚を当人に促す社会的通過儀礼です。

このように、どの人にとっても自分を自分だとする自我意識をしっかりと持って生きてこそ、社会の一員として認められることになるのです。自我の確立は人間として大切なことです。

ところが、ここで考えなければならぬことが一つあります。それは、自分を自分だと意識している自分が(自我が)、自分自身の本当の支え手なのかということなのです。

X

X

ルネ・デカルト(一五九六―一六五〇)というフランスの哲学者は、すべての学問の基礎に絶対に確かな出発点を求めて、それまでのすべての考えの基礎となつている事柄を「方法的懐疑」という手法で徹底的に疑いました。そして最後に、どうしても疑うことが出来ない一つにたどりつきました。それは、疑っている当の「私」は、まぎれもなく、疑うことが出来ないことを発見したのです。そのことを、彼は「私は考える、ゆえに、私は存在する」と言い表したのです。

それ以後の人びとは、このデカルトの判断を正しいものと認め、「私」を、物事を考える考え

方、または物事と関わる関わり方の出発点としたのです。これが一般に「近代的思考」の形なのです。このように、「私」という自我を人間の中心に据え、「自分は自分によって自分である」
「自分の根拠は自分である」「自分の拠り所は自分である」とするのが「自我」なのであります。しかし、はたして、デカルトのいう「私」こそが、人間や世界の究極的な根拠なのか、ということとは、もう一度深く反省しなくてはならないし、現に、近代的思考の矛盾と行き詰まりが生じ、新しい思考の枠を求めて現代は苦悩しています。だからと言って、デカルト以前の中世的なキリスト教が説く、人間の外に神というお方を立てて、神こそ人間を支配する絶対者だというわけにはまいりません。なぜなら、そのような神も、デカルトが言う「私」(自我)が生み出した対象に過ぎないかも知れないからです。それにしても、デカルトが下した確実な判断としての「私は考える、ゆえに、わたしは存在する」とは、ほかでもなく、それは「考える私が、世界を認識するから、世界は存在するのである」ということを意味しているのだとすれば、「考える私の心の働き(主観)が、私の外にあるもの(客体)を認識する(客観化する)」ということになり、神や自然について、それらを対象化、客観化してあれこれと考える「私」の判断と理屈で証明するということで、それは「私」の思いの中、つまり、自我の分別で神や自然を抱え込んでしまうということにほかなりません。イエスはそのような神との関わりをフアリサイ派の人達の熱心な信仰に見たのです。まさに問題は「自我」の立場から一歩も出ない、というところにあるのです。次のイエスの語りはそのことを分かりやすく指摘された一つです。

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のように

話された。

二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。「神さま、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝いたします。私は週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。「神さま、罪人の私を憐れんでください。」言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。

— ルカによる福音書十八章九節以下 —

このイエスの語りには二人の人が登場します。一人はファリサイ人、もう一人は徴税人です。ファリサイ人とは、ユダヤ教徒の中でも、特に神の教え（律法—聖書の言葉）を熱心に守って生きている宗派の信仰人です。一方徴税人とは、ローマ帝国から税金を集める権力を委託され、その権威で規定以上に税金を取り立てて私腹を肥やしている、とユダヤの民衆から思われ「ローマの犬」と人々から蔑さげすまれていた人です。

ここで、特に注目したいのはファリサイ人についてのイエスの語りです。

ファリサイ人は立って、心の中で次のように祈った。「神さま、私はほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でないことを感謝い

たします。私は週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」

フアリサイ人の祈りは、誰が聞いても「何かヘン」だと思えます。いったい何が「ヘン」なのでしょう。聖書は、このフアリサイ人を「自分は正しい人間だとうぬぼれて他人を見下した人」だと指摘しています。

しかし、イエスが「ヘン」だとすることは、それだけではなく、信仰や、宗教、神や律法(聖書)についての彼の理解の仕方です。たしかに、フアリサイ人は一見、立派な生き方をしていきます。が、その立派さの根拠は、「自我」が求め、願望する自分になることです。彼は、自分は熱心に神の教えを守り、正しい生活をしており、徴税人のような不信仰な者でないことを感謝します、と胸を張って祈りました。彼にとつて「信仰」とは、自我が描く願わしい自分になることで、自我を満足させ、正しく立派な自我を高揚することです。彼は聖書の言葉も神も自我高揚のために自我の中に包み込んでしまふのです。結局、彼は、神を賛美しているのではなく、自我を誇り、自我を賛美するために、聖書の教えも神をも利用しているだけなのです。勿論、側で祈っている徴税人も、自我高揚のためのかっこうの利用物にしかすぎないのです。その意味で、彼の信仰と称するその場には、聖書の教えも神も無いのです。あるのは自我だけです。

世間には、「聖書、聖書」「神、神」「信仰、信仰」「救い、救い」と熱心に語りながら、その実、その内容は「自我高揚」だけと思われる熱心な？信仰人がいます。しかし、当の人がそれと気づかずにいるとすれば、それは三文喜劇にもならないでしょう。

一方、徴税人は、自分が何者であるかをよく自覚しているだけでなく、神を知っています。

彼は聖書の教えは守れない。正しい行いも満足に出来ない。神を裏切つてばかりいる。ダメ人間の自分だけれども、その自分を超えて、または、そのような自分の根柢で、そのままの自分を抱きかかえ、生かして下さっている大いなる命に、心の底から感謝して、「神さま、罪人の私を憐れんでください」と、目を天に上げようともせず、自分の胸を打ちながら祈つた。

この二人を見て、イエスは言われました。

言つておくが、神に義とされて家に帰つたのは、徴税人であつて、あのファリサイ人ではない。イエスならずとも、私たちも二人を見て徴税人に親しみを感じ共感する。いったい、徴税人とファリサイ人との差は何なのでしようか。

ファリサイ人は傲慢だが、徴税人は謙虚だった。そこに二人の差を見る人もいるでしょう。また、徴税人は自分の弱さ、罪人性を自覚していたが、ファリサイ人はそうではない。そのところに違いを見る人もいるでしょう。しかし、それらは本質的な二人の違いではないように思います。自我の立場から見れば、傲慢な自我もあれば、謙虚という美德を欲する自我もあります。また、「私は、罪人です。とても罪深く弱い私です」とひれ伏し、涙して祈る自我の人もいます。

問題は、謙虚か傲慢か、人間の罪人性を知っているか否か、正しいことを行うか否かではなく、分別的な自我の柢に自我をそのまま抱え、支え、生かし、完成させる、大いなる命のたぎりを自分が生きているその現場で即刻観て知っているか否か、ということです。

聖書や仏典の文言をどれほど諳んじ、その宗教の教義を多義に知っていても、それらは所詮、分別的な自我の世界内の知識で、聖書が言う信仰の世界とは関係ありません。聖書の言葉を格言のように生活の指針にしたり、楽しく解説されて有り難がっていても、分別的な自我を突き抜け

た向こう側に、生も死もまる抱えの大いなる命の躍動を、自分が今立って現場で直接開眼して見なければ、その人の信仰は、分別的自我による教養や趣味や美徳の一つにすぎなくなるでしょう。イエスはこの一点を問われる。

父親と二人の息子の話

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください。』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りをつくして、財産を無駄使いしてしまった。なにかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて豚の世話させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。そこで彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に有りあまるほどのパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしようだ。ここをたち、父のところに行つて言おう。』お父さん、わたしは天に対して、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』そして彼はそこをたち、父親のもとに行つた。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄つて首を抱き、接吻した。息子は

言った『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服をもつて来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出てきてなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのにわたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところがあなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身代を食いつぶして帰ってくると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、おまえはいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前の弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか』

— ルカによる福音書一五章一一節以下 —

新約聖書には、「福音書」と呼ばれる四つの書物があります。その内容はイエスについてそれまで口伝えて継承されてきた多くの物語を、それぞれの立場と資料で編集し文学形式で記された

のです。初めに記されたのは「マルコによる福音書」で、その年代は紀元七十年頃だとされています。つづいて「ルカによる福音書」や「マタイによる福音書」が記され、最後の「ヨハネによる福音書」が記されたのは紀元一〇〇年前後だと推測されています。

「福音」とは、もともと「福音よきしるし」という意味で、新約聖書に於いては、「イエス・キリストを通して人間に与えられた救いの知らせ」といった内容のことです。

先に紹介しました「父親と二人の息子の話」は「ルカによる福音書」だけにある物語です。福音書を読まればお分かりのとおり、イエスが多くの人々に教えられたことは、神さまの愛について、神さまの偉大さについて、人が日常の生活で気づいていない大切な事柄です。そして、その語り方は「譬え話」を用いられました。

イエスは譬えによつて語られた

イエスはいつも「たとえ」で語られました。それについてマルコ福音書は次のように語っています。イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは船に乗って腰をおろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。イエスはたとえでいろいろと教えられた。……

—マルコによる福音書四章一節以下—

また、マタイによる福音書には次のように記されています。

……イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。

——マタイによる福音章一三章三四節以下——

「譬え」とは、大切な一つのことを深く分かってもらうためにだれもが日常の生活で体験し、見たり聞いたりしている事柄を用いて語る方法のことです。しかし、このような「譬え話」は、一見、分かりやすいのですが、その内容には深い真実が込められてあるので、正しく解釈する必要がある。先に紹介したマルコによる福音書の「イエスはたとえでいろいろと教えはじめられた。……」と言う言葉につづいて、イエスは「種を蒔く人のたとえ」を語られました。が、それを聞いた弟子達と一緒にいた人々が、「たとえについて尋ねた」とあります。そして、「また、イエスは言われた。『このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できようか』」と嘆かれて、種を蒔く人の譬え話を、イエス自ら解釈され、教えておいでになります。

(マルコ福音書四章一〇節以下)

このように、イエスの教えはとも分かりやすい日常的な語りでありながら、その譬え話の内に秘められていることは、誰にとつても、生きる命の芯に関わる大切な真実が示されているので、ここにイエスの言葉を聞くことの有り難さがあります。

さて、初めに紹介しました「父親と二人の息子の話」は、イエスの当時においても、言わば日常的な出来事の一つです。このような日常生活の一つの場面をイエスは語ることによって、人間が生きて行くうえで大切な真実を示されたのです。その意味で、このイエスの話は「譬え話」の

一つとして心して聞かねばと思いません。

「譬え話」の受け取り方

イエスが語られた「父親と二人の息子の話」を、出来事を語る「情報の言葉」とするならば、それは単純な内容になります。二人の息子がいて、弟は父から奪い取るように分与させた財産を全て金に換え、都会に出て行き、放蕩三昧の結果一文無しになって父のところへ帰って来た。が、父は息子を憐れに思つて温かく迎え入れ喜んだ。ところが兄は、放蕩して帰って来た弟と、その弟をとがめず、喜んで迎えた父親に激しく抗議をした、という話になります。

しかし、イエスは出来事をただ語つておられるのではなく、出来事を語ることで、大切な一つのことを表現しておられるのです。つまり、イエスの言葉は「情報の言葉」でなく、「表現の言葉」なのです。つまり、譬え話とは「表現の言葉」です。ですから、イエスの言葉を正しく聞くためには、そこで語られている情報としての言葉を突き抜けて、語られている言葉の出所、語られている言葉が指し示す事柄、即ち表現しようとしている事柄へ導かれなければなりません。そうすれば、イエスが提示したいことは、「このことだったのか」と気づきます。そして、気づいた事を、自分の言葉で言い表すことが大切なのです。そのような作業を「解釈する」と言います。これはイエスの言葉を聞く基本だと私は思っています。

神と人間との関係

イエスが私たちに提示しておられる第一の事は「神と人間との関係」です。神と人間との正しい関係のもとで、「人と人との関係」も「人と物との関係」も本来の在り方となるのだとイエスは提示なさるのです。(マタイ六・三三、二二・三四)「父親と二人の息子」の譬えも、父親は「神」、二人の息子は「人間」として表現されています。その「人間」を「私自身」と言い換えれば、「父親と二人の息子」の譬えは、「神と私自身の関係」が語られている「表現の言葉」だといえます。とすると、この物語には私たちが未だ気づいていない人生の真実が示されており、どの人にとっても無関心で済まされないうことになります。

この物語でイエスが示されたことは、息子達(人)と父親(神)との結びつきは絶対に切れない、ということなのです。息子達が父親に反逆して離れていっても、またどれほど父親に忠実であったとしても、息子達のその行いによって、父親との関係は切れることは出来ないし、また切れないという事です。つまり、父と息子たちとの結びつきのそこでは、息子達の側の善、悪、罪、義、信仰、不信仰などは問題にはならない、ということなのです。事実、放蕩の限りをつくしていた息子も、所詮は父親の愛の中で許されつつ生きていたのです。だから弟は帰って来る事が出来たのであり、父親に迎え入れられたのです。その意味で、どの人も神との結びつきの中で生かされており、死なせてもいただける存在なのです。まさに、人は死んでも生きても神の中です。

その意味で、人間にとって神との結びつきを離れての「独立」などあり得ないのです。しかし、弟は父親を離れて「独立」があるかのように思った。しかし、そのような「独立」は破綻を来たしたにもかかわらず、尚も自己の主体性を維持しようとして、父親との雇用関係を結ぶことで「独立」を維持すべく帰って来ました。「ところが、まだ遠く離れていたのに、父は息子を見て憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」そして最大の歓迎をしました。その父親の姿に接して、弟の自我は吹っ飛んでしまった。彼は、自分の反逆と放蕩にもかかわらず、父親との結びつきが、初めから寸分も壊されることなく、ありつづけていたことに気づいたのです。つまり、彼の自我の底に、独立の底に、主体性の底に、無条件に父親の命がたぎっている事実に見えたのです。彼はその時、本当に「独立」し「新しい自我」に目覚め、人として安心して生き掛かって生きることと安心し、それ故に、弟の行為を大罪とし、弟を受け入れた父親に不正義を感じ、赦し難き不満を抱いていました。その兄に父親はやさしく語りました。「子よ、おまえはいつもわたしと一緒にいるではないか。わたしのものは全部おまえのものだ。」と。

どの人も初めから救われており、大いなる命が初めからすべてを生かし支えているのです。「父(神)は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さる」(マタイ五・四五)そこでのみ人は、本当に安心を得るのです。イエスの提示を一つの教義で包み込み、この世の「宗教」という枠にはめ込んではならないと思います。神と人間との結びつきは人間の分別以前の原事実、即ち創造における自然なのですから。自我は、いつも何かの枠を作り、その枠の中に囲い込むことで安心する。それは自我が生む「魔」である。

命にすぎたる宝なし

イエスは言われる。

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得とくがあるか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

—マタイによる福音書一六章二六節—

「命にすぎたる宝なし」ということわざがある。それは、「命ほど大切な宝はこの世にない」ということでしょう。また、「命あつての物種ものたね」とも言われ、さらに「死んで花実が咲くものか」とも言われます。たしかに、命がすべてのもつとで、死んでしまつては何もならないと、誰もが思っています。その意味で「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるか」というイエスの言葉に、「そのとおりだ！」と思われる方が沢山いらっしゃるでしょう。

しかし、イエスがそのように語られるのは、多くの人が「そのとおりだ！」と思うその内容とは少しちがいます。どこがちがうのかと言いますと「命」の意味についてです。

イエスが言われる「自分の命」とは、この世に於ける肉体的な「自分の命」だけでなく、自分を自分たらしめている「自分の魂」のことです。

魂とは何か

人は自分の肉体的な命については、いろいろと心配します。自分の体の何処かが悪くなれば、何をさしおいても医者のところに行き、治療を受けようとしめます。それは「命あつての物種」だと思つてゐるからです。しかし、「自分の魂」についてはまったく配慮しません。それほど私たちは「自分の魂」には無関心で生きてゐるのです。

それにしても「魂」とは何なのでしようか。普通の国語辞典は「生きてゐるものの命の原動力と考えられるもの。死後は、肉体を離れるといわれる」と解説してありますが、もう少し厳密に言つと魂とは自分の心、自分の精神、自分の思い、自分自身のことだといえます。

たとえば、私たちには肉体があります。自分の手、自分の足、自分の顔、自分の……つまり肉体のすべては「自分のもの」ですが、「自分」ではありません。とすると、当の「自分」はどこにゐるのでしようか。さしずめ、この目に見えない「自分」が「魂」であり「心」であり、「精神」であり「思い」であり「自分自身」なのです。としますと「自分」とは目に見える肉体と目に見えない心(魂)とが一つになつたものだと言えます。としますと、「自分の命を失う」ということは、「自分の肉体と靈魂のすべてを失う」ということです。

肉体と魂(心)

肉体と魂(心)とは別々にあるものではありません。自分という存在は肉体と魂(心)とが同時にあるのです。ところが自分は肉体だけの者だと思い込んで、「自分の魂(心)」には全く無関心です。その結果、その人の生き方のバランスが崩れて「不安定」という歪みが生じてくるのです。それは三輪車の一つの車輪が外れているようなものです。そして不安定は「不安」を生みます。それは「安心」が無くなるということです。例えば、食べて満腹しても満足感がない。着飾って遊んでも何か虚しさを感じる……等。不安とは魂(心)の問題です。生きていることに深い安心感をもてないということも魂(心)の問題です。感謝がない、喜びがない、何時もいらいらして愚痴ばかり言い、人のうわさ話しに明け暮れ、他人の悪口を言い交わして生きる生活、それらは自分の魂(心)の問題です。自分の魂に何一つ配慮せず、したがって魂に安心がないということです。

それにしても魂(心)という固まりのような実体があるのではなく、それは目に見えない「念い」だと言えます。肉体は目に見えるもの、魂(心)は目に見えない念いです。そしてそれが互いに関わりながら同時に働いているのが「わたし」であり、それを漢字で「身体」と書くのです。

「身体」は念いの固まり

私たちの「身体」は、念いの固まりだ、と言えます。なぜなら心が動くと言念いとなり、念いが固まると形となるのだと、私は考えています。（これらのことは人間の意識や意思、または意志と言われているものと対比できますが、ここでは私見は述べない）

ここで思い出すのは、先に記しましたデカルトの大切な言葉です。「私は思う、だから私はある」と彼は言いました。彼は「私は思う」そこに「私」があるという「私自身」は疑うことは出来ない事実だ、と言ったのです。（この解釈はともかく）つまり、思っている私が私自身であるということになります。

私たちの日常生活の様々な行動、例えば見ること、聞くこと、語ること……のすべては、「わたしの念い」によって決定されるのです。お腹が空いて食事をしたいと肉体が要求しても、今、私はダイエット中なので「食べない」と「念い」が決めれば、肉体の要求は入れられません。また、本当は〇〇でなければならぬのだが、と理性が考えても、その人の念いが「やめた！」と決めれば、そのようにその人は行動するのです。また、怒りの念いが満ちてくると、肉体に暴力的な行動を生まします。人の理性的判断も常識も行いも、その人の「念い」には勝てません。肉体的な行動の形はその人の「念い」でどのようにも動くのです。つまり、魂（心）が動くと言念いとなり、念いが固まると形となるのです。ですから「形」という漢字は「あらわれる」とも読む